

随泉寺寺報

2003 年 5 月号

第 3 9 3 号

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

降誕会法座

講師 東善坊住職 龍花 康丸師

講題 「元気に生きる」

五月雨に物思ひをれば ほととぎす夜ふかく鳴きていづちゆくらむ
(紀友則・古今集 153・)

「五月雨の降る夜明け前に寝られずにいると、郭公が鳴いて、一体どの方角へゆくのか」

「五月雨を 集めてはやし 最上川」

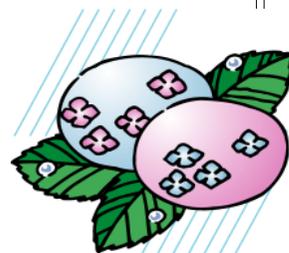
松尾芭蕉

五月の歳時記をみると雨ばかりです。よく考えてみると旧暦の五月は今の六月ですから梅雨の真っ盛りです。雨の歌が多いのも無理ありません。五月晴れというのも近頃のことです。

5月8日～10日まで京都・奈良・大阪に研修旅行に行ってきます。どうか雨が降りませんように。しかし考えてみると五月は田植えや畑では雨が必要な時なのですね。自分の都合であめが欲しいとか晴れて欲しいとか。無量寿経の中に「不能遠観」とあります。自分のことしか見えません。遠くを見る事が出来ないことです。自分の都合でしか見れないことです。

5月の法座予定

- 5月 2日午後6時より……………本部役員会
- 5月 14日昼席午後1時より……………降誕会法座
- 5月 14日夜席午後7時半より……………出張法座 上平原集会所
- 5月 15日朝席午前10時より……………降誕会法座 初参式
- 5月 15日昼席午後 1時より……………降誕会法座



口実とつまみ

花見をしました。4月の本部役員会のあとです。朝から曇り空で雨にならなければいいがと気にしていましたが、夕方5時ごろから小さい雨がぼつぼつと落ち出しました。境内のトイレの横にある桜の花の下でする予定でしたから、雨が降ると外では出来ないで困ってしまいました。結局桜の花は最初に見てもらって、後からは庫裏の横で雨のかからないところで飲みました。花見なんてそんなものと高をくくって始めました。要は口実があればいいのです。花が咲いたから飲もう、月が出たから飲もう、正月だから飲もう等々……。

口実というのは好い加減なものです。結局は目的があってそれを行う理由付けです。みんなで酒が飲みたい、そのための理由のようなものです。

近頃のイラクの攻撃も何か似たようなものを感じます。アメリカやそのほかの国がイラクを攻撃するための理由付けをしているような気がします。戦争というものにはどちらにも正義があります。最初はイラクはテロ支援国家だからといい、やがては大量破壊兵器を持っているからといい、占領してみると出てこないからイラクの民主主義のためといい……。戦争の時使う武器は酒を飲む時のつまみに似ているような気がします。攻撃用自動ミサイルとか、ナパーム弾、劣化ウラン弾など使用テストをしているみたいです。

ところでお寺の花見の時、酒のつまみを何にしようかと坊守は心配しました。酒飲みは酒さえあればいいと思いましたが、まんざらそういうわけにもいきません。いろいろ考えてくれました。

学生の時 もう何もつまみがなくても、酒だけが手に入ったときのことで。そのとき私の下宿には、私の母の作った梅干しかありません。しかも残り3つしかなかった。酒をもってきた私の後輩は、この梅干しをさらの上の上にのせて、味の素と醤油をかけました。そしてこれをつまみにして飲み出しました。「だけど梅干

しを食べたらだめだぞ。食べたら無くなっちゃうから。」というので、延々醤油と味の素をかけ続けて、酒を飲み干してしまいました。しかし、そのとき以来、このつまみは評判を呼び、必ずいつも用意するようになりました。味の素なんて、これを使うと頭が良くなるとか、逆に体によくないとか、いろいろいわれてきたものです。私たちはどうでもいいのです。ただ酒が飲めればいいのですから。口実とつまみはどうも何でもいような気がします。

ご和讃に『外儀のすがたはひとつごとに 賢善精進現ぜしむ 貧賤邪偽おほきゆる 奸詐ももはし 身にみてり』とあります。口実が多くて、偽りが混じっているということです。



世界に一つだけの花

作詞 横原 敬之

作曲 横原 敬之

唄 SMAP

NO.1 にならなくてもいい もともと特別な Only one
花屋の店先に並んだ いろんな花を見ていた
ひとそれぞれ好みはあるけど どれもみんなきれいだね
この中で誰が一番だなんて 争う事もしないで
バケツの中誇らしげに しゃんと胸を張っている
それなのに僕ら人間は どうしてこうも比べたがる？
一人一人違うのに その中で一番になりたがる？
そうさ 僕らは 世界に一つだけの花
一人一人違う種を持つ その花を咲かせることだけに 一生懸命になればいい
困ったように笑いながら ずっと迷ってる人がある
頑張ってる花はどれも きれいだから仕方ないね
やっと店から出てきた その人が抱えていた
色とりどりの花束とうれしそうな横顔
名前も知らなかったけれど あの日僕に笑顔くれた
誰も気づかないような場所で 咲いてた花のように
そうさ 僕らも 世界に一つだけの花一人一人違う種を持つ
その花を咲かせることだけに 一生懸命になればいい
小さい花や大きな花 一つとして同じものはないから
NO.1 にならなくてもいい もともと特別な Only one



一生懸命になればいい



ひとは作業所の寺尾先生の話を知りました。
知的障害を持った仲間のお話です。人並みということで話があったとき、いつも他の人と比べて優劣を競い、勝ち負けを争い、みんな同じだったら安心する。作業所の仲間の一人がポツリと「わしは わしなみで えかろうがい」といわれたそうです。なんと素晴らしい言葉でしょう。その話を聞きながら、スマップのこの歌を思い出していました。それぞれがそれぞれでみんないい。みんなちがってみんないい。



母を偲ぶ

平成15年の幕開けは、12日に姉が亡くなり、母が追うようなくなるまでの2週間、娘を思う母のやりきれない悲しい胸の痛み、親子の深い絆を身をもって示してくれました。それだけに続けての別れは、今までにない心身共に強いダメージを受けました。

特に変わったこともなく普段通りの生活のなか、母とのあっけない別れとなり思い出の詰まった我が家での暮らしは辛いものです。母は小さな体で六人(二男四女)の子供をもうけ、若い頃には苦勞の多い日々だったと親戚より聞かされておりました。しかし母は愚痴を言うこともなく、私たちを育ててくれました。どちらかというとな性的な性格で、事を選ぶに当たって、皆の意見等聞く耳を持たない欠点もありましたが、今何をすべきか一本筋の通った言動は、最後迄生かされておりました。反面八十五歳とはいえ、女性としての嗜みだと毎日お化粧を欠かさず、お洒落心もあり、かわいいおばあちゃんとして、孫、曾孫の人気もあり、膝の上はいつも誰かが座っていた程です。その上、ポケ防止だと云って、筆を走らせ、気づいたことを書き留める努力もしておりました。子供たち、孫、曾孫へと綴られた文は、ほのぼのとした内容が多く、各家族の安全と幸福をいつも願っていてくれていたのがよく分かりました。

母と優しい主人との三人、楽しく暮らした日々感謝しながら、母が私たちに教えてくれたことを、今後子供、孫へと引き継ぐことが、恩返しであろうと思っております。

お母ちゃん、いろいろ、種を蒔いてくれて本当に有難うございました。三十七年前に亡くなったお父ちゃんに、お姉ちゃんと一緒に皆のこと話してあげてくださいね。後になりましたが、生前お世話になりました、皆々様、随分寺様、心より御礼申し上げます。

平成15年3月

鈴木 善恵

